

市川團十郎のルーツ

歌舞伎の十二代目・市川團十郎の生誕八十年を記念した追悼展が、隣町の市川三郷町で開かれています。十二代・市川團十郎は堀越夏雄という本名が示すとおり、一九四六年八月六日の生まれです。

私とほぼ同時代の人ですが二〇一三年に66歳で亡くなっています。追悼展が行われているのは、歌舞伎文化資料館。初代から現在の十三代目に至る歴代の團十郎の関する貴重な資料や舞台写真が展示されています。

なぜ山梨に歌舞伎文化資料館があるのか、疑問に思われるかもしれません。実は市川三郷町は市川團十郎家にとってゆかりの深い土地なのです。江戸歌舞伎の祖であり、現代でも歌舞伎の最

高の名跡といわれる市川家（成田屋）の出所由来については、昔から様々な説があり、謎とされてきました。



市川三郷町にある歌舞伎文化資料館

ところがひょっとしたことから、初代・市川團十郎の曾祖父、堀越十郎が武田信玄の異母弟、一条信龍の家臣であったことが分かったのです。昭和七年のことでした。私の住んでいる笛吹市一宮町にある旧家、石原家から堀越家の家系図や古文書が発見され、堀越十郎が市川家の祖先だということが分かったのです。

時は戦国時代の天正十年（一五八二）。隆盛を誇った武田家は滅亡の時を迎えていました。天正三年、長篠の戦で武田勝頼率いる武田の騎馬軍団を完膚なきまでに叩きのめした織田・徳川の連合軍は、頃は良しと甲斐の国に侵攻してきました。長篠の戦で有能な武将をほとんど失った勝頼は戦うすべもなく、築城したばかりの新府城に火をかけ、逃げ延びようとしています。

ほとんどの武将が寝返ったり、逃亡



一条信龍が織田・徳川連合軍を迎え撃った上野城址。いまは蹴裂神社になっている。

したりする中で、一条信龍は約二百人の家臣とともに現在の市川三郷町にあった上野城にこもって果敢に戦い、切腹して果てます。上野城の址は現在、蹴裂神社となっていて、上野城址の碑

が立っています。

堀越十郎は一条信龍の家臣だったのですから、彼は本来ならここで城主・信龍と運命を共にするはずでした。しかし彼は戦いを前に、城を抜け出し、貴重品をまとめて逃亡します。一説によれば、彼は能役者だったといわれています。武士といっても戦闘が本業ではなかったのでしょうか。役立たずの俺がこんなところにいて、無駄死にしているかなわんと思ってスタコラ逃げ出したのかもしれませんが。

彼は先祖代々篤い信仰を寄せていた下総国（千葉）の成田山新勝寺を頼って、落ち延びます。その途中、立ち寄ったのがが町、一宮町の石原家です。城から約20 kmの距離で、石原家は堀越十郎の娘の嫁ぎ先だったようです。彼はここに貴重品を預け、身軽になり、おそらく大菩薩峠を超えて落ち延びて

ゆきました。

運良く生き延びた堀越十郎は今の成田市で百姓をして余生を送ります。しかしその孫の重蔵は百姓を嫌い、弟に田畑を譲って故郷を飛び出し、江戸の裏社会で侠客として過ごすことになります。江戸の侠客といえば、幡随院長兵衛や新門辰五郎などが有名です。義理人情を重んじ、弱きを助け、強きをくじくアウトローとして映画や芝居に描かれています。重蔵はどうだったのでしょうか。

この重蔵の子が初代市川團十郎になります。生年は万治三年（一六六〇）が定説になっています。幼名は海老蔵。戦いを前にして上野城から落ち延びた堀越十郎のひ孫にあたります。芸名の市川の姓はルーツが甲斐の国の市川の庄にあることからつけられたものかどうかは定かではありません。



初代・市川團十郎

「芸名の市川の姓」と書きましたが、歌舞伎役者には固定した姓（苗字）という概念は基本的ではありません。芸名の市川は姓ではなく名跡（みょうせき）と呼ばれるものです。

江戸時代には庶民は原則として姓を名乗ることはできませんでした。役者たちは家を区別するために屋号を用いました。市川團十郎家は、良く知られ

ているように「成田屋」です。だから私たちは歌舞伎役者を呼ぶときに、市川さんとは呼びません。團十郎あるいは成田屋と呼ぶのです。しかしこれから便宜上、市川家と呼ぶことにします。

ちょっと寄り道しましたが、初代が生まれた時点で市川家は芝居の世界とは直接かかわっていません。しかし当時の役者は「河原乞食」などと呼ばれ、非人として社会的差別を受けていたことから、父親の重蔵がアウトロー仲間としてつながりがあったのかもしれない。

この時期、歌舞伎の歴史はまだ始まったばかりで、踊りや寸劇のようなものにすぎませんでした。今日のようにストーリーがある本格的な演劇にはなっていません。初代團十郎の初舞台は、延宝元年（一六七三）です。

初代・團十郎が活躍するのは元禄時

代（一六八八〜一七〇四）です。上方で近松門左衛門が人形浄瑠璃を本格的なドラマに変革したのがこのころで、役者・坂田藤十郎と組んで「和事」と呼ばれる人情劇を確立します。

江戸では時を同じくして、初代・市川團十郎によって「荒事」が始まります。顔の筋肉を誇張した「隈取」という独特の化粧法と、「見栄」といわれる誇張的表現をもちいながら、奇抜な衣装で舞台狭しと暴れまわる爽快な活劇として人気を博します。この芸は江戸歌舞伎の根幹となるとともに、成田屋代々のお家芸となってゆきます。

展示会の案内をする前に、長々と市川家のルーツが山梨にあることを説明しましたが、町はこのことを記念して昭和59年に上野城址の近くに歌舞伎文化資料館を建設しました。では資料館の展示について、その一部を簡単に

ご案内しましょう。

まず入口近くで目を引いたのが、九代目團十郎による「暫（しばらく）」の鎌倉権五郎の写真です。いわずと知れた歌舞伎十八番の一つです。悪党が善男善女を打ち首にしようとするとき、



「暫（しばらく）」の鎌倉権五郎を演じる九代目・團十郎

「暫く」の一声で、さっそうと現れて助ける場面でしょう。圧倒的な迫力がありますね。

明治時代に活躍した九代目についてウィキペディアは「写実的な演出や史実に則した時代考証などで歌舞伎の近代化を図る一方、伝統的な江戸歌舞伎の荒事を整理して今日にまで伝わる多くの形を決定、歌舞伎を下世話な町人の娯楽から日本文化を代表する高尚な芸術の域にまで高めることに尽力した。その数多い功績から「劇聖」と謳われた」と記述しています。

展示室に入ると「助六」と「隈取」の展示があります。「助六」は興行元の松竹による演目案内によれば、

「劇場いっばいに再現される江戸最大のアミューズメントパーク「吉原」。そこへ登場するは江戸一番の伊達男助六」ということになります。



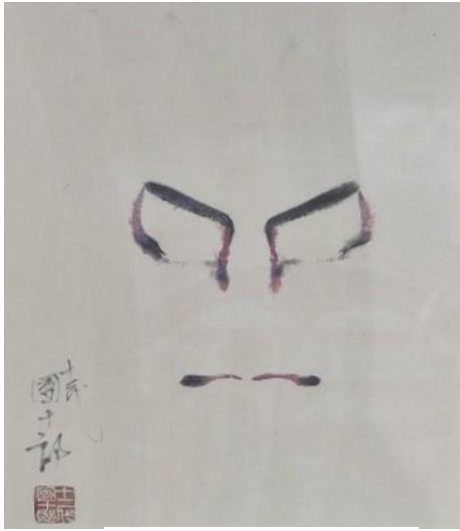
助六由縁江戸桜の舞台

「助六由縁江戸桜」の舞台の再現の展示は資料館の目玉の一つでしょう。助六役は十一代目をイメージしたと解説にありました。

十一代目は戦後、歌舞伎の復興期に

その美貌と品格ある風姿、華のある芸風、高低問わずよく響く美声などを売り物に「花の海老さま」と呼ばれ、空前の歌舞伎ブームを巻き起こしました。左側の黒い羽二重の小袖を着て、傘をさしているのが助六です。幅広の博多帯には成田屋の定紋である三升が描かれています。頭には江戸紫の鉢巻き、足元は黄色の足袋に下駄です。

隈取に関する展示は、市川家から寄贈された「押熊」です。「押熊」とは舞台が終わった後に役者が布に顔を押し



十二代・團十郎の押熊

当てて、隈取を写し取ったものです。一つの舞台で一回しか取れませんから貴重なものです。上に掲げる隈取は十二代目が昭和60年の襲名披露興行で助六を演じたときの押熊です。

隈取は演じる役柄によって色や描き方が決まっています、これは「むきみ隈」といわれ、色男に用いられる隈取だそうです。

次の隈取は、現在活躍中の十三代目が「暫」を演じたときのものです。

荒事を代表する豪快さと力強さを象徴するような隈取ですね。

鼻筋、額、顔の両側に紅で隈を取り、あごも三角に赤く塗っています。眉毛は外に跳ねるように黒く塗られています。超人的な力を発揮する正義の味方は赤い隈取、悪者は不気味さや冷酷さを表現した青い隈取と決まっています。



助六を演じる十三代・團十郎

もう一つの展示室には、團十郎が使った衣装や江戸時代の歌舞伎や浄瑠璃の台本などがありました。私が見たかったのは、歌舞伎文化資料館開館の時に、十二代團十郎から寄せられた感謝状です。少々長いですが、全文を文字起こしたものを載せておきます。

「抑々、我が市川家発祥の地は如何なるやと求め長きに亘る。時至り昭和七年市川三升、十代團十郎来甲の砌、石原家に三百有余年秘蔵せし古文書並に系図一卷閲覧、書中に曰く、堀越十郎

家宣、元武田家に仕え後、下総国幡谷に移る。

其の孫、堀越重蔵江戸に出づ。其の一子即ち初代市川團十郎也云々と。三升驚喜し直ちに銅像建立と思ひ立ちしが果さず。父十一代團十郎志を承け、此地に木標を建つも既に朽ちつ。

不肖此の処に佇み、父祖の遺志を想ひ、一碑の建立を發願するに、幸いなるかな普く甲州有志の賛同を得、今茲に市川團十郎家發祥顕彰碑の成就を見る。歡喜無量、感悦天翔ける如し。

此の挙に惜しみなき芳庇を賜りし後援各位の御恩顧、市川家一家一門子々孫々まで永劫忘れまじきもの也。

昭和五十九年十一月吉日

十二代 市川團十郎 敬白

ここに出てくる古文書や系図を保管していた石原家は古代の甲斐の国の豪族、三枝氏の分家です。三枝氏は甲斐



石原家を訪れた十代・團十郎(右端)と石原家当主・守一(右から2人目)

源氏が發祥するはるか以前に、大和朝廷から甲斐に派遣された国守級の在庁官人で、『日本書記』に「三枝連」の名が見える名族です。

いまは「富士写真館」という写真業を営んでいる石原家の倉庫には、おびただしい数の古文書が山積みされており、市川家に関する文書が見つかった

のは全くの偶然といえます。

石原家の当時の当主、石原守一は、一報を受けて訪ねてきた十代目團十郎に古文書をことごとく無償で譲り渡しました。石原家を訪ねてきた十代目と守一が一緒に撮った写真が展示されていました。右端が十代目、その隣が石原守一です。

十代目が古文書や系図を見て、すぐこれは本物だと確信したのは、市川家の方にも自分たちの祖先は武士で、姓は堀越であったということが語り継がれていたからだと推測されます。その証拠に、明治になって庶民が苗字を名乗れるようになったとき、市川家はいち早く堀越の苗字を役所に届け出ます。十代目の團十郎の本名は堀越福三郎でした。

石原家にあった堀越家に関する古文書の内容は、十二代目の感謝状から推



團十郎発祥の地の碑

測できますが、資料館には原文はおろかそのコピーもありません。渡す前にコピーをとっていないか石原家に聞いてみました。いま生きているのは守一の孫の嫁さんですが、すでに九十を超える高齢で、はっきりしません。

おそらく戦前のことで、コピーを気軽に取れる時代ではなく、存在しないのではないのでしょうか。しかし町が公費を投じて資料館を設立した根拠となる文書、あるいはその写しが資料館にないということは、臥竜点晴を欠き、残念なことではないでしょうか。

いまはその文書は市川家の私有物です。戦災などを潜り抜け、その文書がいまも保管されているのなら、市川家からコピーをいただくほかはありません。展示の説明をしてくれた町の職員、八木敬子さんに、市川家に申し入れてコピーを取り寄せたらいかがでしょうかと丁重にお願いしておきました。

去年は歌舞伎を題材にした映画「国宝」が大ヒットし、異例のロングランを記録しています。「国宝」は任侠の家に生まれた主人公が歌舞伎に人生を捧げ、人間国宝となるまでの半生を描いた作品で、山梨を拠点に活動するダンサー・田中泯さんも出演しています。映画「国宝」のヒットの影響が歌舞伎文化資料館にも確実に及び、来館者が急に増えているそうです。

最後に余談ですが、石原家と川崎家とは縁戚関係にあります。お互いの家



弁慶を演じる十二代・團十郎

もすぐ近くですから、普段から交流があります。したがって辿りたどれば市川家（堀越家）とも遠い縁戚関係にあることになりましたが、こちらは現在まったくお付き合いはありません。

令和八年八月吉日

川崎光洋